

特116

462

個性の教育



始



# 個性の教育目次

一、序論 講演の目標

二、本論

第一章 心理學最近の傾向

第一節 心理學最近の傾向とそれに関係する最近の哲學思想

第二節 現象學的傾向

第三節 精神科學的傾向及び自然科學的傾向

第四節 三傾向の限界及び關係

第二章 個性の發展

第一節 個性の意義

第二節 個性の發展

イ、智的素質及情的素質の發展

ロ、個性の教育

三、結論

1、先天的要素の發現と刺戟

2、價值的要素の發展

第三章 個性の歸一點

イ、衣食住の欲

ロ、性 欲

ハ、人類 愛

ニ、人類愛への二途

第四節 個性教育の三大時期

イ、幼年 期

ロ、青年 期

ハ、自己教育の時期

第三章 個性發展の客觀的測定

特116  
462

# 一、序論 個性の教育 講演の目標

個性といふ題目を選んだ所以。佛教の語に「安心起行の正路」といふのがある。自覺してその行を爲し得る正しい路といふ意義で、この道に立てば何事も疑なく、迷なく進み得る。さうすれば自己も満足であり結果も有効である。教育には特にこの安心起行の正路に立つ事が必要である。その必要を考へて選んだ次第である。

この路に進む爲には次の事が大切である。

一、本質諦視の立場に於て一切を體認すべし。

體認は認識とは異なる。只解して知るに非ず本質に直接ふれてそれを認めると言ふ。最近心理學上の現象學的見方は是である。

二、眞の眞理は理性の父によつて生るゝものに非ずして至愛の母にのみ宿る。

現在眞理と言はれて居る中には普通の眞理と、眞の眞理と二種ある。普通の眞理は理性によつて生るゝもの考へられて居る。カントの考へ方は是である。眞の眞理は理性の力では生じない。至愛によりてのみ生れる。

これは精神科學的心理學より檜崎氏の特に主張する所である。ゲートは「愛の泉に咲く眞理は無いものであらずか」と言つた。そのあり度いものであると希ふ心持はこの考へ方である。

三、魂の本質或は個性の核心は人類愛敬の精神なり。

魂は個性と同じ意味であり、本質とは中心點の事である。普通にも斯く考へられやう。

四、人類の愛敬は人間本然の性にして意識の奥底を流るゝ淨水の泉なり。

15. 3. 1  
内交

人は惱みを持つ時之に氣が附く。惱み惱んで絶望の極に至つて之を發見する。絶望の極この泉を見出しその水を飲んで元氣を回復する、回復し得る所以は人類愛敬の精神に在る。

五、至情は至情に依つてのみ動き、魂の覺醒は魂に依つてのみ覺醒す。

これ個性教育の基礎である。

六、鐵を鍛へんとせば其熱し居る間に之を撃つべく、魂を覺醒せしめんとせば靜かに其の素地を養ひ、その正に熱せんとするや全力を以て之に向ふべし。

個性を發展せしめんとするには自然の素地を待つて、或時期（主に青年期）の正に熱せんとする時全力を以て向はねばならぬ、これ眞の個性教育である。

個性教育は其外學校に於ける個性教育、及び自分自身の個性教育と三時期がある。

以上を中心にして純粹の心理學の立場から述べやう。

## 二、本論

### 第一章 心理學最近の傾向

#### 第一節 心理學最近の傾向とそれに關係する最近の哲學思想

心理學最近の傾向は哲學の最近の傾向と密接な關係がある。故に心理學に關係ある哲學思想の發展を知らなくてはならぬ。

現今の哲學思想は一八七〇年乃至七五年以後の獨逸哲學の再興運動より起つたものである。その運動の余波であり流れであるものが現在に及んでゐると言ひ得る。その運動は再興運動と言はれるのであるからその以前は衰微の時代であつた。一八一〇年頃迄の獨逸に於ける哲學と科學との關係は、哲學は科學の根底であつた。科學の據つて立つべき土臺であり猶其上に科學の進むべき道を指導するものであつた。故に哲學は科學の王と言はれその地位を實際に持つてゐた。

一八三一年ヘーゲルの死後その地位は破られ自然科学が哲學の地位を奪ふ様になつた。

一八五〇年頃を獨逸哲學の破産時代と言ふ。この頃は科學と哲學とは分離したのみでなく、敵視するに至つた科學は哲學を逃れて全然その領野に入れまいと努め指導を離れて引出されまいとした。當時の科學思想は唯物的思想であつた。即其特色は(1)全てを機械的法則に考へた精神も細胞的に見做し聯想記憶等も物理的に考へた。(2)全て物を要素から成立つと考へた。元素が結合して種々の物体が生ずる様に精神も亦要素の結合より成ると考へ心理學方面にても心は感覺と單一感情が結びついて精神が出来上るとした。(3)理想を認めない。

以上の如き唯物的思想にては物質界は説明し得るが、精神界は説明し得ない。其處に唯物思想に對する不満と反感を生じ、新しく之に對抗しやうとする努力が起つた。これが一八七〇年以後のもの、生ずる動機であり再興の精神である。

一八七〇年以後新しい努力に依つて生れたものも色々の傾向に分れた。

第一は當時有力であつた自然科学研究方法を利用して精神の研究を爲さんとするもので、ヴントが中心人物である。ヴントは精神科學建設の希望を抱きその爲に自然科学的研究方法を適用せんとした。即ち物理學、生理學、天文學等の研究方法を採つた。實驗心理學、メンタルテスト等はこの傾向より生じたものである。研究の方法が自然科学的である故に自然科学的心理學と名づけられて居る。從來日本に於ける心理學は殆んどこれであつた。この心理學の貢献した處は人間の自然性を明らかにした點である。例へば人の素質及びその發展、或は個々の能力即ち感覺、知覺、記憶、推理力等を質的並に量的に明白ならしめた點に於て寄與する所が少くなかつた。然し人間の文化性、(或は理想性)つまり動物になく人にのみあり、文化人のみにある理想性の研究には接近し得なかつた。又個性の示す點即道德意識、美意識、價值意識等の研究には自然科学的方法は殆んど其用を爲さず甚だ薄かつた。其點に於て行詰つた。

最近この派より他に道を拓かうとするものありそれが再興運動と關係を持つて居る。

第二には精神科學の研究には自然科学の力をからず、精神科學特有の方法に依らんとするものである。この傾向のもの六七あり、其中現代に至るも生命を有するもの三種ばかりある。

1、カントに歸れ。先驗的方法に依らんとするものにてカントの進んだ道より研究しやうとするのである。これも亦純粹カント派、新カント派に分れた。

先驗的方法とは魂の作用をつきつめそれを出発点として研究せんとするのである。

2、カントの背後に進め。カントよりもつと深く、もつと時代を奥に溯れといふもので、凡そアリストートル

たりまで行かうとする。この派を非カント學派といふ。この學派の權威者はフッサールである。この學派は現象學的方法に依つて研究せんとする。故にカントの考へ方は捨てねばならぬと主張する。

3、ゲーテに歸れ(進め)。カント、フッサールより具体的にゲーテの考へ方に依つて進まうとするものである。この派の權威者はデイルタイである。故にデイルタイ派と呼ばれて居る。ニイチエ、スプランガー、リット等もこの考の人々である。この派は精神科學的心理學を建設して之を基礎にしやうとした。ヴントの自然科学的心理學とは全然異つてゐる。之を基礎にした教育は文化教育と言はれてゐる。この教育學は學界に於ても認められて居る。將來教育界に深い影響を與へるであらう。

(以上の概括したものの教育週報創刊號心理研究にあり)

## 第二節 現象學的傾向

現象學の研究は現象學といふ特殊の研究方法より起る。現象學とはフッサールが一九〇〇乃至一九〇一年に發表した「論理的研究」の中に始めて發表した言葉である。フッサールは一八九〇年頃より數學の基本概念即ち單位、量、多、計算等の研究をして居た。その研究に從來の論理學と當時流行の心理學とを用ひやうとした。當時流行の心理學は自然科学的研究による心理學であつた。心理學を用ひその知識を基礎として哲學の説明をせんとするものを心理主義學派といふ。然しフッサールは心理主義にては到底哲學問題を説き得ないといふ結論に達した。其處で過去のもの、無力を知り、數學の基本概念を説くに足る、哲學の問題を説き得る純粹論理學を研究せんとした。そして心理主義を攻撃した。日本にはこの考へが教育を純粹論理主義に依らねばならぬと誤り傳へられた。フッサールは哲學問題について論じたので教育に就いては無い。

フッサールは純粹論理學建設の準備として現象學が必要であるとし一九一〇年以後その研究を續け、一九一三

年に「現象學序論」を著した。その中に現象學の對象と方法を論じてある。

(詳しくは佐竹氏著「カントとフッサール」及び米田氏著「經濟論叢」に紹介されてゐる。)

現象學とは現象を對象とする學問である。但しこの現象は物理學、生理學等の現象とは異り現象學的立場から見た現象である。故に現象學の對象にはどの學問の對象にするものも對象となり得る素地がある。一切の現象がそれを現象學といふ立場に於て見た時に對象となり得るものである。然らば現象學的立場とは何か。フッサールは學問の立場を二つあると見て居る。一は自然的立場で、他は現象學的立場である。双方共現象論的立場といふ點は同一である。

自然的立場は直観より出發する。何月何日何時とか、何處とかいふ様な時間及び空間に制限され支配されて居る個別直観より出發する。

現象學的立場にては時間及び空間によつて制限されるものを除去する。故に本質のみが残る。現象中の偶然性を除去して本質のみを認める直観を本質直観といふ。現象學はこの本質直観より出發し本質を對象とするのである。本質直観より出發して意識の中の時間及び空間に制限されぬ純粹意識の構造、作用等を中心の問題とするのである。これが心理學と交渉のある所以である。フッサールは之を哲學の基礎とし、出發点を定めやうとしたのである。この考は非常に有力な説でカント學派よりも深く學界の先頭に立つて進んで居る。

純粹意識の研究に本質直観といふ方法を提唱してゐる。本質直観とは佛教の「娑婆即寂光の正眼」とか或は「互石發火」とかいふ見方で物を見るのと同じである。故に第一に偶然性の排除といふ事が必要である。吾々には日常偶然性が目につき易い。心の中から先づそれを取除かねばならぬ。佛教の所謂止(空)の見方である。止を徹底した極限を觀といふ。止と觀とを結んだものが本質である。斯く偶然性を排除して十分準備した上に本質を見るを本質直観といふ。

現象學の研究對象は純粹意識である。純粹意識は主觀と客觀の分れぬ前の直接經驗とは異なる。ベルグソンの純

粹持續、及びフライテの行とも異なる。主觀と客觀と別れて居るものである。主は純粹意識の作用に當る。作用に對して現はれる對象が客である。故に現象學は作用、對象及び作用と對象との關係、この三題目が研究の中心となるものである。

カントは思惟が世界を形づくる。物自体は分らない即ち對象は分らない。思惟と對象との關係は不明である。考へた。コヘンはこれを問題にして物自体は思惟が造り出したものであるとして關係づけた。思惟の所産であるとして思惟を高調した。

フッサールは純粹意識の作用と對象との對立は認められた。而も分れて同時に成り立つと考へた。現象學が新しい見方を與へて、双方の間に橋を架けるのであると見られる。此處に哲學上重要な意義がある。

作用と對象即ち形式と内容との見方を現象學的に見る時は對立し乍ら關係づけられる。關係を認める爲に先づ對象を捉へねばならぬ。本質直観の立場に於て把握する。(1)偶然性排除。(2)本質還元。(3)本質把握。この三段落を経て意識の對象を捉へ得る。斯くして捉へたものを本質概念(本質を示すに最も都合の好い概念)にて記載する。それは今迄にない、偶然性を表はさぬ言葉で記載するのである。たゞ記述である。純粹に記述するのみで何等法則はない。

次に作用を見るには作用を反省して行くのである。即本質直観の方法、反省の方法、この二方法にて關係づけるのである。この二方法の中では反省の方法が根本的なものである。

現象學の他の科學に對する地位は中性科學であると言はねばならぬ。他の科學と對立すべきものではなく、分化しない以前の學である。どの科學も一度は本源の中性に還つて出發せねばならぬ意味に於て他の科學の基礎と言ひ得る。純粹論理學、心理學の根底であり、自然科學も一度はこれ進行かねばならぬとコヘンは言つて居る。

現象學の價値は批判哲學に在る欠陥を埋める又は救ふにある。カントの批判哲學研究者であるコヘンがランゲの唯物論史の序文を書いた中に「批判哲學は結局形式主義に陥る」といふ語がある。批判哲學は内容を與へない

概念のみを示す故に空虚である。言葉としては完全であるが具体的の内容がない。これは批判哲學の最後の運命である。田邊博士も洋行の前後を較べて「數理哲學の研究」の中に「過去の哲學的生活は今と異ふ。過去は餘りに論理的であつた」と言つてゐる、矢張り内容空虚の意味である。現象學は之に對して内容を與へるものである。シルラーは批判哲學批評中に「非常に豪い學者が白を挽いてゐる。けれど其中には粉がない」と言つてゐる。之も批判哲學は先驗的形式的であるが内容がないとの意である。マックス、セラールは先驗的で内容のある倫理學を書かうとして現象學的に書いた。コヘンは内容を與へる哲學を考へて哲學としての心理學を建設せん事を論じたがフッサールと同じ所を目指したのである。斯く現象學は内容を與へる点に於て貢獻してゐる。

### 第三節 精神科學的傾向及び自然科學的傾向

精神科學的心理學は純粹意識が時間及び空間を通じて現はれたものを研究の對象とする。即ち文化意識を研究するもので文化的價值を追究する心の有様の問題を論ずるのである。心には價值追究の心と盲目的の心とある。自然性は盲目的である。自然科學的心理學はこの自然性を對象としてゐる。故に意識は純粹意識、自然意識、文化意識の三方面がある。子供の觀察もこの三方面より見る時は十分觀察し得やう。

精神科學的心理學はデイルタイが基礎を定めた、自然科學的心理學の權威はヴントである。デイルタイは大學に於て神學、哲學歴史を學び、ヴントは大學にて醫學を修めた人である。これにても双方の差違を見る事が出来る。

デイルタイは一八三三年に生れた。ベルリン大學にてロツツエ、ランゲ等に師事しシュライエルマツヘルを研究した。この研究は彼の終生の研究であつた。個性を研究するにはこのやうな過去の優れた個性の歩んだ道をその儘辿るのが最も捷徑である。ベルリン大學の講師となり、其後各大學を歴任し、ロツツエの死後ベルリン大學

の教授となり一九一二年に死んだ。當時獨乙學界に於て彼に對する批評は「デイルタイは過去の時代及び人間の内面性研究に他の如何なる人よりも深く、精神科學の認識論的建設者で學界に對する影響はこれより後に表はれやう」と言はれた。彼は殆んど著述として纏つたものはない。雜誌等に發表したものが多し。全集が今出版されてゐる。彼は獨逸哲學の破産時代に「精神界の獨立の存立」を確信して細胞的な腦髓とは別に之を見た。それを主張する爲に精神科學を建設して唯物論に對抗せんとした。建設の出發は生命である。故にカント、フッサール等とは異りゲーテの道を歩まうとしたのである。然らば生命とは何か。

(1) 生命は認識の前に在り。認識は思惟と言つても好い。物を考へるといふ智的な働は生命より起る。故に生命は理性によつて捉へる事は出来ない。カントは理性によつて生命は捉へ得ると考へた。「生命は理性の產物なり」と言ひ思惟の所産と考へた。デイルタイは之を思惟が生命の所産であると考へた。そして「理性は生命の背後に進む能はず」といふ結論を得た。故に科學としての哲學は不可能であると見た。カント派非カント派共に其可能を豫定してゐるのに彼は哲學を文化現象の一であるとした。そして生命より科學も哲學も藝術も生れると考へた。生命は捉へ得ないものであるから生命に接近する事が精神科學の直接の目的であるとした。究極の目的は人間の社會的生活を指導し得るものにならねばならぬとした。

科學の爲の科學とか、藝術の爲の藝術とかいふ事が普通考へられてゐたが彼は生活に影響せぬものは嘘であると言つた。

(2) 生命は體驗の内に現はれる。これもゲーテ中心の考である。體驗の中に一瞬時には一部分だけしか現はれないが永い間に生命の全部が現はれるものである。

(3) 生命は前進力がある。この前進力は不可抗的な力である。ショウベンハウエルが盲目的力と似てゐる。

(4) 生命の最高の形式は一切を支配する。生命を價值實現の最高の原理と考へた。動物性即自然性より理想性まで全てを含むものを生命といふ。而して理想性がこの中心を爲すものである。

精神科學の仕事は精神組織を明らかにするにある。又生命の構造を研究すると言ふ事も出来る。自然科學的心理學にては分解して調べるのであるが、精神科學は要素が如何に結合されて生命となつて居るかを見るのである。要するに文化意識の精神組織又は價值意識即ち美意識、法意識、道德意識等は如何なる組織であるか、中心の問題である。その精神の中心は個性である。

(日本には構造心理學と言はれて來た。詳細は倫理研究七月號の「デイルタイの精神生活に於けるストラクチャーの研究」を参照)

デイルタイは精神科學を建設して自然科學に對抗し、獨立せしめやうとしたのである。自然科學的心理學は本能、衝動といふ様な人の自然性及び動物性のみを見出した。精神科學的心理學は價值追究の精神を求めた。故に文化意識とも言へる。文化生活、社會生活、歴史生活の中に價值追究として現はれる精神である、故に更に社會的歴史的實在を研究する學であると言ひ得る。即ち人間の本質的傾向を問題として居る。社會的、歴史的實在は個人の心(意識)の中に如何に現はれるかを研究するのである。而して文化意識の中心は價值的個性の發展が形成するものである、その意味に於て個性が中心となる。

自然科學的心理學は假定を出發點として進んでゐる。丁度煉瓦を積み上げて家を建てる様に、假定の上に假定を積み重ねて行く。故に何程研究されても心其者は解らない。精神科學的心理學は體驗を出發點とする。體驗も成熟せる大人の體驗より進む。自然科學的心理學にては極めて幼稚な意識より論ずる。子供、動物、アミーバ、物質と進んで其處より説明を始める。そして精神の部分より全体に及ばさうとする。故に動物性自然性のみを見出す。精神科學的心理學は全体より部分に進むので人間性一般を序論とするのである。

本質に就いても自然科學的心理學は多くの人に共通する性質を本質として取扱ふに反し、精神科學的心理學にては純粹に現はれた所を本質と見る。人間尊重といふ點については双方認めるのであるが、自然科學的心理學に於ては人行會つた時挨拶する心持を選び、精神科學的心理學にては柩の前に立つた時の嚴肅な心持を眞であると言ふ。故に精神科學的心理學は日常現はれず或る特殊の場合に現はれる深刻なものを捉へて論ずるのである。

#### 第四節 三傾向の限界及び關係

以上の三心理學は相排斥すべきものではなく、互に補助し合ふ可きものである。自然科學的心理學は自然性、精神科學的心理學は社會學、現象學は純粹意識の研究に於てお互に大切な任務を持つ。吾々はこの三精神を共に使つて行く事が必要である。

精神科學的心理學者は自然科學的心理學者を排斥するといふ。デイルタイの攻撃する所は自然科學的心理學者が自然科學的心理學のみを以て心の全部を知り得ると主張する點に就いてある。三心理學は各特有の領野がありその範圍に効力がある。適當に限界を認めて互に補助し合はねばならぬ。

〔心理學の基本問題〕參照、自然科學的心理學の限界を論じたものである。

## 第二章 個性の發展

### 第一節 個性の意義

個性には三つの要素がある。自然的要素、歴史的要素、自我的要素これである。自然的及び歴史的要素は環境で、自我的要素は天稟である。この三要素の相互作用で個性は出来上つてゐる。所謂運命の如きは自然的要素の一つである。個性研究の中心問題は自我の問題であり、次は歴史の問題——歴史の要素を重んじ歴史と個性との關係を重視する——である。以上の如き要素から個性が成立するとすると、個性の觀察の際には觀察の態度を確立することが肝要である。(1) 没價值的見地、(2) 價值的見地、前者は、個性の見方に於て價値に關係させずに見ること後者は價値に關係して見る方法である、尙(3) 部分的見地、(4) 全般的見地を區分し得る、これに前二者が關係する故個性の見方は何通りも存する、故にこの中の何れを用ふべきかを定めねばならぬ。没價值的で部分的に見ると自然科学の見地となり、全般的で價值的の見方を精神科學の見地と呼ぶ、從來の心理學は多く自然科学の見地に立つてゐたが、これのみでは個性の素地は明かにし得るが本質は分明しない。故に最近精神科學的心理學が唱導され來つた。

價值的見地で個性を觀察すると、價値の實現を爲し行く主体としての特種性を明かにし得る。そして價值的個性が眞の個性である。價値には全般的と特種的とが存する。特種な見地から見れば特種的價値を認め得るがこれは全般的價値を作る要素であり一時的一方面的である。本眞の個性は全般的でなければならぬ。價値とは何であるか、人間の渴仰の對象となるもの、人間の本性を示すものである。これは生命の必然的な事實であり、止むに止まれぬものである。個性の成立の基礎は價値への渴仰心である。

價値の具體的種類は非常に多い、各人求めんとする價値は際限なく多い故に具體的個性の數は非常に多い之は實驗的統計的に證明し得る。今茲では概括して大体の種類に就て述べよう。

渴仰心が強くても對象が明瞭で無い場合、或は刻々に變化する場合(例へば青年時代の如き)を浪漫的個性と云ふ。これは對象が表れないもので個性が確定しない。個性が明白となれば對象が明白となりて渴仰の中心が定まつて個性が出現する。渴仰の中心となる對象は人が自然に對し人間に對し、神に對して執る態度に表はれる。此態度の相違が個性の本質的な相違である。然し普通では如斯明かな個性は成立しない。個性の他に特種的な個性——自然性、衝動等が時間を異にして渴仰の中心となる内觀すれば心は何時何等かの方向に牽引される。一定の方向に定まつてゐるとよいか終始不定である。全般的な價値を求めて突進する個性は容易に見當らない。特種的個性が多い。スプランガーはこれを六の種類に分けた。經濟的な個性(衣食住)、理論的個性(眞理追求)美的個性、宗教的個性、これ等は一人が他人との關係なくしても生れるものであるが二人以上の間に於て生ずる個性に社會的個性(愛)、政治的個性(平等)、がある。スプランガーは子供の伸長も大体に於て此の六價値によつて伸長する故子供の個性の觀察の標準となる云つてゐる。然し個々の個性の研究には悉く之に當て餘るものでない故、之を標準とし、大人の個性を研究しそれによつて觀察すること必要なり、地方や、歴史上の個性を抽出し、子供の實際と比較研究することも必要である。総て精神科學的心理學は、人間性一般を定めて個々の個性を觀察する。中心の價値を基として個性を定めるものである。

中心價値と他の諸價値との關係を見るに、個性の特長はこの中心價値と其他の諸價値との關係及び諸種の價値との相互關係及び其の關係の安定の度によつて定まるものである。個性は一方には固定的であるが一方には流動的である。一定不動の個性は實際には存しない。デイヴィスは「凡ての人は個性形成の過程にあるもので如何なる個性も矛盾してゐる幾つかの自我、調和の出来てゐない諸傾向を含むと云へる」と云つた、ストリンドベルヒは個性の發展を書いた「或魂の發展」中に「多くの人間は組織されない偶然の生活に終るを常とす」と云つた、慥か



に個性の完成その教育は一生の大事業である。

個性の中には諸傾向が埋没されてゐる。此埋没されたものを一定の方向に調へ行くことが教育である。故に教育の出発点として生れながらに其人が如何なる状態にあるかを見るのが第一の問題である。是の問題を二つに纏めて見る、基本衝動（本能）と本質傾向（價值的傾向）とである。第一は人間の自然性で自然意識發展の基礎である。第二は人間の理想性で文化意識發展の基礎である。佛教では第一を欲と名づけ、第二を法欲と云ふ、純粹意識に於ても此の二つの傾向を見得らるゝ。それ自身目的を持たず盲目的に進むものは第一で結果から考へると或る目的を實現した事となる。その結果から目的が自覺されて来る。そこで基本衝動が文化意識に轉ずる。基本意識は發達すれば文化意識に進むべきものとなる。故に自然科学的心理は基本衝動を以て人間の本性と考へ、精神心理學に於ては本質傾向を以てそれと考へる。結局この二つの傾向を實現することが魂の目標、個性發展の目的である。この二傾向以外に感情と理性とが働く。感情は人間の衝動の指導者である然しそれは直接的で短かい時間の範圍に働くのみである。長い時間に於ては理性によらねばならぬ、更らに一層間接となり永遠の彼方となると理性によるも難く又感情の指導を俟たねばならぬ。そしてこの感情の指導は理性によつて純化された感情である。これを知恵と云ひ第二の思惟と云ふ。個性發展の基礎には以上の五要素を要する。そして發展の窮極は至愛（純化された感情）である。

## 第二節 個性の發展

### イ、智的素質及情的素質の發展

さきに、個性成立の基礎は價值への渴仰心であるとした。この價值への渴仰心は如何にして生づるか。個性の基本構造を考ふると、諸の傾向が基本となつてゐる。即ち基本衝動と本質傾向とである。基本衝動の結果に對す

る感情から自覺したる衝動満足に移り、本質傾向に轉づるものである。この本質傾向が價值への渴仰心である。諸の傾向とは結局意志の事であつて意志が個性發展の基調である。そして意志の要求の實現の爲には感情と理性とを要する。感情は短かい時間に於て理性は長い時間の範圍に於て意志を支配する。この意味から感情と理性と意志とは教育上陶冶價值を有つのである。しかし、意志が根本價值を持つと云ふべきであつて、意志がその方向を迷ふとき理性のみで判断出來ぬ場合、第二の理性——感情が指導するのである。故に感情教育に於ては時間の短かい範圍に於けると又長い時間の範圍に於ける場合との兩者の教育的方法を考へねばならぬのである。

個性の發展は、先天的のものと、後天的のものと二つの要素の關係から發達する。先天的要素とは基本衝動（意志、感情、理性）であつて、後天的要素とは自然と歴史との影響である。茲では先天的要素のうちで意志、衝動を省略し、知的素質と情的素質の發展について考へて見よう。概言すれば個性發達の程度は、知的素質の發達と密接の關係があり、智的素質は個性の發達と程度迄併行に發達するものと云ふことが出来る。

智的素質には二つの要素が區別出来る。一般的智的素質と特種的素質とである。前者は何事を爲さしむるも或程度迄普通に出來得る（又反對に何事を爲さしむるも十人並に出來ぬといふ）といふ素質で、後者は特に數學、音樂などに秀でゝゐるといふ如き特種的素質である。一般的素質の高き人は、特種的素質と併行する事が多くその率は七十五%で一般的素質低くして特種的素質の勝れたものゝ率は二十五%である。この兩者が併行せぬものに於て、個性をそれぞれ發達させようとするには、智的素質の各々の相違に従ひそれぞれの智的教育的爲さなければならぬ。この點に於て自然科学的心理學の方法によつて智的素質の測定を必要とするに至るのである。智的素質の測定に二つの方法がある。團體的検査と個人的検査とである、兩者は目標とするところは同様だが方法が相違する故區別するのである。個人的検査法の代表的なものは、ターマンの Measurement of Intelligence. で一般に行はれてゐるものである。（ターマンの方法に就ては、上村福幸著一般智能測定法及び久保良英著兒童研究所紀要、等を参照すること、尙大坂市學務課にて作つた大坂市案もある）個人的検査法は一人一人の兒童の検査に長

い時間を要する故多數の兒童に就き一々行ふは困難であり、且効果も少い。問題の兒童、特種の兒童に適用すべきものである。次に團体的検査は一時間二時間乃至數時間を要する調査も簡單に整理が出来、その整理の結果知的素質の程度によりて學級編制に利用することの出来る効果がある。この團體検査に於て今迄使用された方法には、幼兒の一般素質検査には十數人位迄單に印だけつけさへすればよいものがある。これは檜崎淺太郎工夫の検査用紙(中文館出版)がある。又一年生、三年生、五年生、の各々の一般的素質の検査には檜崎三木共著、教育心理學の中にその方法が詳述されてある。一般智的素質の検査の結果は、學科の成績と對照して、兒童の素質を定めるに使用である。又殊に尋常六年生の最後の學期に於ては素質の優れたるもの、劣れるものに就て検査を施すべきで、これは上級學校の選擇職業の撰定などの指導の参考とすべきことが大切である。普通のものに相當の所までなを爲さしめても到達するであらうが、特種のものには左様にゆかぬ故検査を施し、科學的に導くことを要する。(尚以上の論述に就て詳細は檜崎淺太郎著「一般素質検査法の試み」を参照)

一般智能素質検査の結果のうち、男女に於ける智的素質の相違について簡單に述べやう。普通には男女に於て相違するものと考へられてゐるが検査の結果に於ては小學校では殆ど同様であると考へることが眞理に近い。ターマンは十三歳までは男女相違せずとなし、反つて女子の勝れてゐる或年齢があると云つた。六學年で男女を比較するに殆ど同じである。差の著明なものは小數の個人から生ずるもので、或學科に於ては三%或學科に於ては二十%平均十%兩者相違するが大体に於て差が無い。器械的記憶、論理的記憶、技巧の力等は女子が勝れ、推理力、抽象力、總合力、分類の力などで男子が勝れてゐる。大体に於て小學校では知的教育は男女同様に取扱ふべきものと云へる。

次に、一般素質の分類とその教育について述べよう。ターマンは一般素質の検査の結果、素質の品等を次の九に分けた、白痴、痴愚、モロン(ギリシヤ語の馬鹿といふ意)、愚鈍、遲鈍、正常、上智、秀才、天才(准天才を含む)である。白痴は大人に成長しても精神が三歳以下の子供と同じきものでこれは教育の途は殆ど無い、痴愚は精神力が大人となつても四五歳以下のもので、身体的特徴は皮膚粗悪で蒼白、傷を受くも容易に治癒せず、言語不完全で手眞似身振りを以てし、或は病的に喋りつゞける等である。學科に於ては、手工音樂には耐けても國語算術に於ては普通の兒童の十分の二も覺わぬ。かゝる兒童は、算術は二十以下の計算が具体的に出来る程度に止め、國語は、假名にて思ふことを多少書き得る程度に止め、職業の準備教育をするのが良いと思ふ。解剖的に云へば、神經細胞の發達が遅れ突起の數が少い、モロンは大人になつても精神の力が八、九歳位に止るもので餘程優れてゐるものでも十一歳以上に達する可能性のないものである。一例を云へば身体年齢八歳六ヶ月で精神年齢四歳二ヶ月智能率五十と云ふ如きもので、二年生にして假名が書けず、十以下の計算が出来ぬ程度である。かような兒童は全体の五%乃至十%程はあらうか、アメリカでの調査によれば二%存すると云ふ、愚鈍、これは一見正常兒と異ならない、精査の結果道徳心の欠けしもの、或は發作的に剛情なことなどが發見される、此種の兒童は尋常三年頃迄は普通の成績であるがそれでも算術に於ては器械的運算は速であるが推理に困難で、國語に於ては書物は讀むが意味が判らぬ、これ等の兒童は多くは生れつきの病氣の故が多い、學校に於ては特別學級で簡易な讀書算、及び道徳教育を爲すこと、實用科目を撰定し、具體的な教育を爲すことが必要である。遲鈍は殆ど普通人と區別し難いが特別な指導を爲さぬと躓き易いものである。正常といふ階級は記憶、想像、推理、判斷に於て相當な力を示し順應力を具ふるものである、學校に於て一齊教授を爲すも順應し得るこの種の兒童の比較的多數なることが學級教授の可能を成立させてゐる條件である、上智は凡ての智能に於て正常に勝れてゐるもので中には早熟なものもあるが大多數に於て勝てゐる。ターマンは上智の兒童は劣等の家庭に現れるより優等の家庭に表はれること多くその比は一と五であるといふ、日本での調査もこれと同様である、この階級の兒童は、全兒童の一割五分存し、遲鈍生と同割合である、正常兒と同等の教育にも大なる欠損はないが遲鈍生以下と同列同一であつてはならぬ、秀才、この階級の兒童は百人中四人位の割合に存し、多く専門的職業階級の家庭に多く、この兒童は特別進級に耐得るもので、アメリカの調査によれば十二%は二ヶ年特別進級、五十四%は一ヶ年特別

進級二%は其學年に止り、五%は一年下の級に居たといふ。

智的なもの、特質素質の發展について、子供の生後暫くは食を求むる欲の生活、睡眠の生活を送り、次に感覺的な刺激を求むる、最初に色彩、明るさを渴仰する。生後六ヶ月頃に至り色彩に對する興味が強烈となり色彩感覺が著しく發達する、それより少々遅れて音に對する興味盛んとなる、かよふに子供の智的素質の發達は一時期には一素質のみ發達するもので之を興味交互の原理と稱し、智的素質發達の重要な特色である、次に八、九月にして言葉に對する興味が起り、自己の喉より出る音に對して興味を感じる、この興味に乗せられて發音の發達を促し、滿一歳前後には直立の要求起り、言葉、音に對する興味を減じて十六、七ヶ月迄續き、其間に歩行し得るに至り次に周圍の言語を收得する時期に入る、言語收得の好時期は十八ヶ月を中心とし、一ヶ月に新語を五十乃至百記憶する、かような言語收得の旺盛な時期は他に存しない、故に最も適當なる母國語修得の時期である、第二年の終期になりて語彙が三百八十、三歳の終りに六百八十、四歳の終りに千三百となる、かゝる速度で言語を收得する、これ迄が言語教育の最も重要な時期である、國字を教へる時期、外國語教授の時期は、母國語收得の次の時期とすべきである、この言語の記憶は器械的記憶によるのである、この器械的記憶の發達について調査すると、幼兒より九歳迄は耳の記憶が有力で以後は眼による記憶の方が優れてゐることを發見する。十二歳以後この傾向は著しくなり年を追ふて漸次大となる、そして尙十三、四歳になると器械的記憶が發達を稍々中止する器械的記憶を各學年によつて數字的に見ると、男子にては尋常三年一〇、五尋四一一、〇尋五一四、〇尋六一七、〇中學一年二一、五二年二二、九三年二四、三四年二五、六五年二五、七となる。女子にては尋三一〇、五尋四一二、〇尋五一五、〇尋六一六、〇女學校一年二一、七二年二一、七三年二五、三四年二一、一五年二七、〇となる。これに就て見ると器械的記憶は中學三年に於て發達の頂點に達する、此中最も成績のよきものを五人分取出して平均して見ると、男子にては尋常三年二二、〇四年二二、七五年二六、五六年二六、一。女子に於ては尋三一七、〇尋四二〇、〇尋五二四、〇尋六二五、一となる、これによりて見れば器械的記憶は早くより發達する

ものなることを知る。尙尋常六年生と大人との差は百と百五の割合である。

智的素質研究の上から教育上種々なる問題に就て考へると、器械的記憶に訴へる學科、教材は下級の學年に出來るだけ下げること、殊に外國語教授の如きは中學三年迄に完成するやう方法を立つべく、五歳より初めて九歳迄耳より記憶させ、單語、單句を教へ、九歳以後は正式な外國語教授をなすべきである。小學校幼年級の學科は國語に關する時間を最も多くすべく一般に幼學年に於ては器械的記憶に關する學科を多くし、推理に關する學科を軽くすべきである。算術の教育効果の測定によると、尋常一年生に於ては器械的計算の速度、正確度の率最も悪し、三年生となれば是等が發達してゐる。これを見ても三年以後から器械的練習に力を注ぐ方が有利なることを思はせる。尋常五年以後推理の力發達し來る。五年以下は聯想、推理の働きは少い。國語の教育効果の測定を見ると、國語讀本の一二年の材料が不足であることを考へさせる。(是等の詳細なる研究は檜崎淺太郎著「精神力學的研究」を参照すること尙記憶に就て耳と眼との單獨なる使用、兩者併用の場合、或は長期練習と發達、練習と氣質、朝より夜迄の勢力の消長、睡眠の効果等につき教育上參考にすべき研究結果についても右著書の中に在り)

次に情的素質の發展について述べやう。個性の發達は、智的素質の特長による事よりも、個性の個性たる所以は、價値に對する感受性の強さ、及び價値を實現する力に存する。直接には價値に對して如何なる程度で感受するか、その強さ、速さ、持續等が個性と非常な關係があり、又價値を實現することが個性の主要性である。價値の感受性について男女を比較すると、女子が男子より優れてゐる。これ、女子は男子より速く直覺的に理解する爲めである。ゲーテは、「女の心は金の林檎を盛る器なり」と云つた。多くの價値を容れる點に於て、女子は男子より勝れてゐる。男子は感受性より價値の實現性に於て勝れてゐる。或る價値を抽出して實現することに於ては男子は專問的であり、他の價値に盲目的となる。若き教育ある女子が男子の專問的の學者を好まぬのは、價値の一面のみを知つて凡てに通じないのを好まぬのである。

價値の感受性は如何に發達するか、是は感情の強さと併行する。兒童期に於ては十一歳以後に發達する。感受性が發達の頂點に達するのは十四歳乃至十六歳の青年期に於てである。感情中心の生活時代である。青年期は現實(客觀的なもの)に重大な價値を認めず、事實より心持に多大の價値を認めるものである。この十四乃至十六歳といふ事は種々なる點より云ひ得らるゝが宗教生活に入った人々の傳記を研究してもかように云ひ得らるゝ。此時期は外界の刺戟に最も振動され易い時期である。感情の衰退する時機は三十八、九才以後である、ゼームスは三十五、六才以後は感情は殆ど無力だと云つた、二十五才以後のものは血にならぬ。然し、青年期の反覆と云ふことがある。四十才以後の人に於て一度若返ることがある、若くは感情の一度燃ゆることがある。これは道德生活に於て往々危険なる年齢となることである。天才はこの感受性を度々強烈に繰返すものである。

#### ロ、個性の教育

以上素質の發展と云ふことから個性の發展を考察したが茲に纏めて個性の教育について論述しよう。

個性の發展を論ずるには、先づ論者自身がその個性を或程度迄發展させてゐるか否か問題である。故に個性の教育に就て説を爲し得る權威者は誠に寡い。

個性の先天的な要素の發現には必ず一定の刺戟を要する。そしてその發現の方向はこの刺戟の範圍外に出ないものである。故に個性に與へられた刺戟が無ければ個性は發現し來らない。幼兒期は個性が判然せぬ故如何なる刺戟を與ふべきかも定まらない。特種性(氣ムヅカシ、又は樂天的などいふごとき)は判るが個性は判然しない生後一週間に於て、育て易いか困難かは判るがそれは體質から來るもので個性ではない、故に幼時に於ては、個性の發達を教育的にしようとするには、出來得るだけ多くの種類の刺戟を與へ勝れた個性の發展の素地を作るより途がない。

個性發展の爲めに與ふべき刺戟は、外界の價値的刺戟就中理念(イデア)魂、精神である。この魂、精神は、歴史文學、藝術、宗教、社會的雰圍氣、聖人の直接の訓話の中に藏せられてゐる。今藝術の中に藏された魂の例を取

るならば、ミレーの畫眼を開いたのはミケロアンゼロの畫の中にある強さである。ミケロアンゼロの魂がミレーの個性を刺戟したのである。眼に見ゆる物の奥に或る魂が存し、多數の繪の中に一貫した魂が存する、之のミケロアンゼロの魂がミレーの個性を刺戟したのである。次に社會的雰圍氣——狭くは家庭の感化——がこの例となつたものを見るに、ミレーの繪に宗教的心持の漂つてゐるのを看取するのは、彼の家庭の雰圍氣より來たもので殊に彼の祖母の魂が彼の宗教心を惹起したと云はれてゐる。ミレーが畫の修行に巴里に赴くとき、祖母は彼に、「私はお前が神様の云ひ付けに負いたり不忠實になつたならば一層お前の死ぬのを望みたい」又「お前が畫家となる以前に基督者であることを覺てたれ、みだらな事に身を任かすな、永遠な事に身を捧げよ、審判の喇叭の今に鳴ることを忘れるな」と云つた、これがミレーの宗教心を刺戟したのである。次に社會的雰圍氣が如何に個性の發展に刺戟となるかもストリンデルヒの「魂の發展」の中に見よう、「青年時代は全く時代の兒であつた。時代は懷疑的で物質的であつた、自分は不知不識時代の人として成長した、それは時代が望んだ通りのものであつた。」

魂は魂のみによつて覺醒される。普通に人生意氣に感ずること即ち是である。魂を動かさうとする教育は東洋では佛教が第一である。例へば法華經の觀世音菩薩普門品第二十五に化身の記述の如きは魂の教育は魂のみを以て爲すべきを反覆したものである。印度の寓話に、獅子の子を羊に養はしめたのに最初は羊の如く従順であつたが、或時獅子の吼を開いてそれに應じてよりもう羊の如くに非ず獅子であつたと云ふのがあるが獅子の魂が獅子の子を動かしたのである。魂が覺醒する即ち個性の誕生は偉大なる故人の魂の体得或は感激の姿によりて起るのでその例としてジョンメチュワート、ミルの個性の誕生について考察しよう。

ミルの個性の發展は彼の自叙傳(日本譯として今泉、石田兩氏のものあり)を見るべきである。彼がこの自叙傳を書いた動機は、彼の受けた教育の記録を残すべく、現今の教育は幼年時代と少年時代を殆ど空費してゐるが彼の教育は是等の時代を最も有効に使用したこと及び高等教育は十四才迄に終了し得ることを證明しようとする

ものであるといふ。彼の教育は父ゼーミュス、ミルが非常な骨折で爲したもので、父は彼を少時から學者に仕立てようとし、如何に著述に多忙なる間にも子の爲めに十分な努力を拂つた。ギリシヤ語の教育は三才より開始し、カードを以て單語を教へ、文法は名詞動詞の變化を教へ、語彙を記憶してより解釋をさせ、イソップ物語を譯せしめた。八才迄にギリシヤ語の書物を三十八冊讀了させた。父はその子の能力の最大限を要求して居た。彼が父のことを回想して、人間の中に短氣な人は父であるが自分の爲めにはよく辛抱して氣永に教へてくれたと云つた。父は散歩の時に大抵學問を授け、本を讀めばノートを作らせ、後から暗誦させた。八才にして妹と共にラテン語を教へられ、又弟妹に教へさせられた。十二才にしてギリシヤ、及びラテン語を完成した、十二才から思想の研究に入らしめアリストートルを研究した、十三才にしてリカルドの經濟原論を教へられこれによつてミルの經濟學の眼を開かせようとした、次にアダム、スミスの富國論を讀ました、これはリカルドの原論から富國論の誤謬を發見させようとしたのである、かように父は書物を與ふるに一定のプランを樹て、行つた、十四才にて佛國に遊學させ歸國後ベンザムの立法論を三冊與へられこの書物によつて自分の個性を發見せしめられた、ミル曰く「ベンザムの立法論を讀んで、初めて精密な方法で學問をなした。私は高處につれ行かれ、精神世界の智的探究によつて、全く別人となつた」と、此書によつて過去に集めた智識、信仰一切が統一されてミルの個性は成立したのである。

かように過去に於て集めた個々なるものを、統一するものが存しないと、個性は成立しない。斷片的な多くのものは、偶然性のみにて、本質的なものを求めてこれを統一しなければ個性は生じない。

個性の發達には、持続的な要素が必要である。それは何であるか、内面的意志の力である。偉大な個性の發達は内面的には、自我の精進の結果である、ゲーテはファウストに於て「絶ゆることなく努めて撓まざるものそれを我等は救ひ得るなり」と云つた。ベトーベンは一七九六年雜記帳に「勇氣を勵ませ、例へ、肉体は弱くとも、自分の天才は打ち勝つであらう。二十五才それが自分の今の年だ」と書いた。日本に於ける例をどるならば山岡

鐵舟が劍道悟入覺書に彼の劍道發展の經歷を書いたのを見ると絶わざる努力の跡が歴然たるものである。

持続的な要素として内面的意志の力を第一に擧げたが第二に過去の偉大な魂の發展の記録に案内されて進むゆゑの個性發展の要件である。ミルの個性發展の道は即ちこれで、ベンザムの著作を通じてミルの魂が發展したのである。他人の魂に添つて進む間に自ら自己の魂が開かれるのである。國木田獨歩が「我神の前に、古人の傳記を嚴かに學ばむことを欲す」と云つたのは此事である。デイルタイは一生シュライエルマツ、ルを研究し、コヘンはカントを二十年研究し、ゾラはユーゴーの著作を全部暗誦した。皆この過去の偉大な魂の發展の記録に案内されやうとしたことである。カントはルソーのエミールによつて個性を形成した。カントの遺稿に「私は私の傾向から云つても探究者である。私は認識に對する限りなき渴仰を感じる。それで更らに認識を進めようとする欲望の不安と一歩一歩進展に對する満足を感じる。或時は、私には是等總が人類の誇りであるように思はれた。それで何物も知らざる賤民を卑んだ。ルソーが私を正しくして呉れた。この眩惑的な優越な感情は消れた。私は人々の敬ふべきことを知つた。若し此事を知らなかつたら、私は私自身を一般の勞動者よりもつと無用なものとしたかも知れない」と書いた。これは、眞理も人間に關係しなければ意味をなさぬといふ思想である。カントがエミールを讀まねば此思想迄に及ばなかつたかと思はれる。トルストイもエミール及懺悔録を崇拜した、是等は、過去の偉大な個性發展の記録を辿つて個性發展の芽が生ずることを示すものである。過去の偉大な個性の發展の途を辿らすと云ふことから訓練上の自由主義と、或る型による訓練との比較を見るべく、型とは、偉大なる魂の記録に添はせて行かうとすること、この型を以てするに適當なる時機は何時であるか、幼兒期は困難である。それは殊に青年期が最も適當だと考へらるゝ。

最後に第三の個性教育の要件として、偉大なる個性の發展には偉大なる刺戟を要するといふことである。例へば芭蕉の詩眼を開いたのは蟬吟であるが、芭蕉の個性の發展は蟬吟の死と云ふ大きな刺戟を受けたことからである、紫式部は彼の夫の死によつて性格發展の刺戟を得た、かような大刺戟は、運命により偶然に來ることが多く

人為的に與へることは非常に困難である。

### 第三節 個性の歸一點

二四

個性の歸一點は人類の愛敬、それである。個性には中心が存する、そしていろいろな要素はその中心に従属する。その中心に位するものが動搖し易くはならぬ。中心に位して動搖せぬ不動のものは何であるか。この事は個性の根本の構造から考へらるべき事である。先づ人間を動かす強い基本衝動の中で、衣食住の要求——經濟的欲は如何なる人も動かされるものであつて、殊にその中食欲が満足出来なければ其他の價値的要求は生じない。胃の腑の充實を目標とするマルクスの強さは茲點に存する。個性の教育に於ても食の問題は充分考へられねばならぬ。個性教育の出發點は、衣食住の欲を或程度迄満足出来る様な能力を養成しなければならぬ。衣食住の欲望が満足し得ると次に人間は何を求めたのであるか、性、美、研究、政治の如き價値が要求の對象となる。この種々な價値の中で先づ性に對する欲求が最も強い。性欲は他の欲求より一層基本的である。然し性欲は本來の性質が利己的なものであり、欲求は強烈であるが満足の後では深い心の喜びを残さない。一時的欲求である。凡て心の満足は自己愛からは生じない。何故ならば自己愛から得た喜びは、心が高尚に赴くに隨ひ漸次薄弱となる。純粹愛から生じた喜びは心が高尚になればなる程増長する。自己に關係した満足は範圍が狭い。純粹愛は範圍が擴大される。利己は明るくない。純粹愛は満足心が明るい。利己心と利他心とは活動の強さが違ふ。永續的な強い力は必ず利他心から生ずる。例へば母が子供の爲めに働く力と普通の力とは出方が相違する。人の爲めに行ふ——人の愛が人間の行動を起す最も強力なものである。コヘンは、之を人間感情と呼び、之を人間を愛する情と、人間を敬する情とに區分した。即ち純粹感情である。倫理學、哲學、藝術學等は皆この純粹感情から出發したものである。純粹感情が事實的の姿をとり、客觀化したるものが藝術品である。トルストイは人間の最も合理的な行動は愛であり、愛は合理的であると

共に、光明に充ちたもので、人生の諸の矛盾を解決して呉れるものであると云つた。更らに、メーテルリンクは「光明に包まれた智慧の連山には理性の高い峰より以上に、聳れた他の峰々がある。即ち善と信仰との峰寛大と或は後に到つて僅かに承認することを決行する」と、又「愛ある人の心からは、已も知らぬ靈智湧く」と又、「理性は愛の最初の合圖に従ふべきものである」(メーテルリンク「智恵と運命」)「貧者の寶」(等參照)と云つた。ベトローベンが失戀の際、友人に與へた書簡の中に「自分は人の爲と云ふ點で救はれた、君の子供を徳が高くなるように育てよ、それが幸福への第一の道だ。金錢では幸福は得られまい、僕が悲惨の中心に於て救はれたものは人の愛である」と。藝術の如きも人の愛から生ずる。ミレー曰く、「藝術の使命は愛の使命であつて、憎惡の使命に非ず、貧者の苦を描くも藝術は富裕な家庭に對する嫉妬を刺戟することを目的としない」テオドル・ルソーは「藝術は或る孤獨の人が、自分の爲になる答がその後幾時代の後に於ても人類の爲になるといふことを確信して、自然の神秘を研究してゐるあのさ、やかな捨て、顧みられない幽所からでなくば出してくるものではない」と、又ゲーテは、人は自分の愛すること以外の何事も知ることには出来ない、智識が深く更に完全であるべき爲めには、愛は更らに強く、更らに激濁してゐなければならぬ」と云つた。そして、世界は表象から出來てゐると云ふカントの考に反對して、世界は愛から出來てゐるとなした。「愛に充ちた同情のみが實任を生み出す唯一のものである。實任は私の心の中で何時でも實在するものである」と云つた。結局愛が根底になつて、働いたものゝみが人間精神の内容となる。そして、この愛に到達する途を考へると、主なる二つの方途がある。その一は性愛が縁となつて、遂には眞の愛となることである。此は普通の道であつて、性愛は利己的であるけれど、これが求めることなき愛に進むものであつて、シユテイルマツヘルの宗教論にも性愛が宗教に入る道の一つとして説かれてある、彼曰く「人間は獨りの間は世界が無い。神は男の補助者として婦人を造つた、こゝから世界が現はれる」と。第二の途は、人間の本質と、人間の運命とを体認することから愛が生ずることである。釋迦の愛はこの途から

二五

起つた、人間の本質は種々に考へ得るが、人間の本質は到達することの出来ぬ永遠純粹な美や眞を求め求めて悲壯な努力を續けるものであると考へ得らるゝ。人間の一生を一貫して観ると人間の本質を把へることが出来る。中の人を考へると、人の内面的具体的な生涯は、或る價值より更に或る價值を求め、求めて進むものなることを見る事が出来る。人間の本質、運命を体認すると、茲に眞の同情が生ずる、罪を憎みて人を悪ますといふ人は即ちこの本質を云ふのである、人間の生活に於て或る瞬間をここにこの本質が現はれるが、常に不斷に表はれるものでは無い。人に對する愛は上述の二つの途から起る、かゝる人間愛に基礎を置いてゐれば他の如何なるものを持ち來るも破ることが出来ない。故に不動不易である。故に道德から藝術に赴くべく、藝術から道德へは行かぬものである。コヘンが「藝術から道德への道は絶たれてゐる」と云つた。若し人が人間愛に傷けられると他の愛に轉ずるもので動物、自然、藝術、科學、を愛するに到る。しかし人の爲といふのでなくて單に科學の爲めの科學といふような事を唱へる科學者があるとしたならば、かゝる科學者は如何なる人にして失望することであらう。ペトローベンは聾になつてから自然を愛した、西行が自然を愛する心は人を愛する心から生じたものである。

#### 第四節 個性教育の三大時期

上述の如く、個性發展の最後は人の愛まで行くべきである。が最初個性が判然せぬ時期は、その發展の素地をのみ養ふべきである。故に幼兒期は個性教育の自然的條件を周圍に供へることに止る。個性の眼を醒ます時期即ち青年期に到つて個性教育はなされるべきである。そして個性教育は職業教育と結びつかねばならぬ、今普通の人の考では、個性が發展してから職業へ入るものと考へられてゐるが、反つて職業に適合するように個性が發展するものである。出來得るならば個性の方向と一致した職業を與へることが最も望まじきことである。兎に角職業教育の中で個性教育を行ふことが最も善い。人間は職業を通じて個性を發展するより他に適當な途は少い。個性教育と職業教育とは握手すべきである。職業教育の傍ら普通教育を加へねばならぬ、そして基礎教育と普通教育とを區別しなければならぬ、基礎教育は個性發展の自然的條件を與ふるもので、普通教育は他の社會の大体の事柄を教へ、自己の屬する職業との關係を明かにするものである。兎に角今迄の個性教育は職業教育と結びつくことを忘れてゐたことは大なる欠陥である。個性教育に於ては職業的個性と同時に一般的個性が發展し來る様へらるべきで、青年團の教育とか専門學校時代の教育とかはかゝる性質のものである。

第三時期は所謂自己教育の時機である、この時期の個性教育に就ては省略する。

## 第三章 個性發展の客觀的測定

二八

茲では個性發展の素地を與ふる基礎教育の場合のみを述べよう

教育測定は、たゞ教授の効果の測定のみならず、教育全般の測定が大切である。此場合問題となることは、教育の効果が全部測定し得るものなりや否やといふことである。先づ教育の効果は如何なる方面に表はれるか、それは(一)純粹に精神的なものに於て、(二)精神身體的のものに於て、(三)身體的のものに於て、の三方面である。そして客觀的測定をなし得る爲めには、測定の結果が空間化されるか、計算し得るかであらねばならぬ。故に、(一)の純粹に精神的なものにはこの事が大部分に於て不可能であつて(直接に一小部分には適用し得るとしても)間接に測定し得るものとして推定する事のみを許さるべきものである(二)及び(三)に關係する範圍に於ては教育測定が可能なものといひ得らる。勿論(二)及び(三)の測定の結果のみで教育全般を批判することは出来ないが、この(二)と(三)の範圍に於ける測定は出來得るものである。

測定の場合に於て、その目標として(一)に標準が客觀的なるべきこと(採點の標準、問題の撰定等に於て)(二)に系統的なるべきこと(三)に結果として教授されたるもの、幾割か々學習された形に於て出されなければならぬことである。今この要件に合致するやうに考案された教育測定の實例として國語教授の効果の測定に就て大略を述べるならば、第一如何なるものを測定するかは國語教授の目的から考へ出さるべきで、しかもその測定目標が一般に異論のないところから進める事を要する。例へば、讀字力、讀書力、の測定の如きであつて、尙これ等の上に文章構成力、文章の理解力、等測定すべき項目を豫め系統的に書き上げ置き、一部分宛、漸次徹底的に測定すべきである。その一部分を測定するには例を以て云へば、假名を讀む力、書く力、漢字を讀む力、書く力、を測定するにせば、問題の撰擇を客觀的にする必要から現行の國語讀本に於ける新出文字の順序に於て爲し、尙その數多きに過ぐる故第一卷に於てその1-2二卷にては全部、三卷にては1-4、四卷にては1-4、五、六、七

八、九卷の各卷にては1-5、十、十一、十二、卷にては1-10と云ふ割合で抽出し、その上讀ませ且つ書かせて測定すべきである。かゝる客觀的測定の方法、結果は未だ完全の域に到達してゐない、けれども之を以て次第に教育の明確性を與へ得るものと考へられる。(尙上述の國語の効果測定の結果に就ての詳細は檜崎氏の著書の該部分を參照すること)



### 三、結 論

上來論述したところを簡単に結論しよう。  
教育を心理學の方面から研究するには、教育の問題によつて或は現象學的心理学によつて説明されねばならぬものもあり、或は精神科學的心理学によつて説かれねばならぬものもあり、或は、自然科学的心理学の方法を以て究明されるべきものも存する。いづれも問題から云へば皆第一位にありその間に高下の差は無い。教育問題の性質によつてこの三者のうち何れかを用ふべきかを明瞭にし、その研究がある制限されたる一部分に在ることを忘れざるべきである。そして研究の際は研究の大目標と、大徑路とを心に銘記し、その上細かい事實を精密に注意することが肝要である。

(この「個性の教育」は、大正十四年九月、檜崎文學博士が下伊那教育都會の爲めに約九時間に亘りて講述されたもの、大要を、原太一、川上孝平の兩名が筆記したもので、また博士の校閲を経てゐない。不明難澁な点はそのために諒察され度い)

大正十五年三月十日印刷  
大正十五年三月貳拾日發行

發行者

掛川良平  
長野県下伊那郡飯田町一三五四

印刷者

河野久治郎  
長野県下伊那郡飯田町九六六

編輯者

原太一  
川上孝平

294

521

終

(升久)